2020 年度事業 進捗報告書（実行団体）

● 提　出　日　：　２０２２年９月３０日
● 事　業　名　：　ひろしま農業型自立支援プログラム～生きづらさを抱える若者の多様な「働くこと」「暮らすこと」を支える事業
● 資金分配団体　：　NPO 法人ひろしま NPO センター
● 実 行 団 体　：　NPO 法人ブエンカミーノ

① 実績値

アウトプット	指標	目標値	達成時期	現在の指標の達成状況	進捗状況＊
①－1 若者を支援へ繋げる導線づくり a)HP リニューアルされている	a)リニューアルされたかどうか	a)リニューアルされている	a)2022 年夏頃	リニューアルされ、SNS との連動によって更新されている。	1
b)紙媒体を作成し関係機関に設置されている	b)設置場所の数	b)50 か所	b)2022 年春頃	ワークキャンプのチラシ作成。福祉センター、各福祉団体、など約 10 ヶ所に設置。団体パンフレットのリニューアルは作成途上。居場所事業チラシ作成、設置依頼はこれから。	3

c)説明会が実施されている	c)実施回数、参加者数	c)説明会：20 回、200 人（サポステ・大学などの相談機関にて出張説明会）	c)2024 年 1 月	＊当事者への講演・説明会 6 回、計　人（もみじの会、ひきこもり相談センター当事者会、若者交流館、農業体験参加者、修道大学学生、など） ＊関係機関との連携に関する面談 12 回（若者交流館、北部サポステ、広島家庭裁判所、公益社団法人日本駆け込み寺、RCC、安芸高田 JA、四日市役場、認定 NPO 法人ポラーノ、安佐北区社会福祉協議会会長、亀山学区自治会町内会連絡協議会会長、安佐北区障害基幹相談支援センター、自立訓練事業所 TAKE5、NPO 法人ウイングかべ安佐北区障害者相談支援事業所、安佐北保健センター、相談支援事業所リアライブ高陽、一般社団法人百人邑、株式会社あおぞらみやん相談支援、はくなまたた相談支援事業所、NPO 基盤強化サポート研修会）	2
①－2 物理的な環境を整える a)シェアハウスが整備され、若者にとって安心安全な住環境が整っている	整備内容	a)移転に伴う居室のリフォームが達成され、より安心安全で快適な住環境を整えることができている	a)2023 年春頃	＊共同のリビングに冷暖房が新設された ＊シャワー室やトイレなどの備品が一新され使いやすくなった。 ＊共同スペースが模様替えされ、より人が集いやすくなった。 ＊移転先であった古民家の使用目的が「居場所事業」に変更となり、シェアハウスは現行のままに。 ＊新たな拠点としてシェアハウス近隣に地域交流フリースペース OKAZAKI が 10 月に改装終了。シェアハウスに住む若者たちも日中の活動の場として利用できるようになり、ワークデスクや WIFI、プリン	1

				ター設置など完了したことから、若者たちも PC 作業や事務作業など快適に行えるようになった。	
b)農作業場が整備され、若者にとって安全で本格的な訓練環境が整っている	整備内容	b)ビニールハウスの設置、作業場の整備によって、安全で効率的、持続可能な作業環境が整っている	b)2023 年春頃	＊ビニールハウスが 2 棟設置され、きゅうりの植付、サツマイモの育苗などが始まり、継続して収穫、出荷作業などを行えている。 ＊畝たて機、動噴機、草刈り機を購入し、効率よく農作業できるようになった。 ＊薪割機を購入し、新たな作業として、薪づくり・スウェーデントーチ作りが始まった。 ＊広い作業場を無償で借り受け、ソファや大型扇風機、作業台、ハンモックなどを設置し、新たな作業場が整った。 ＊IKEA よりベンチやワゴンなど家具寄贈を受け、作業の中心に大きな作業台を完備することができ、大人数で輪になって作業できるようになった。	1
①－3 精神的な環境を整える a)若者がカウンセリングを受けることができている	a)回数、人数	a)100 人	2024 年 1 月	237 回、76 名	1
b)ワークキャンプに参加してスタッフや仲間と関わった	b)回数、人数	b)200 人	2024 年 1 月	イベント回数 21 回、のべ 350 名 （ワークキャンプ、農業体験、サマーキッズ、ハロウィン、年末もちつき大会、災害ボランティア、収穫祭など）	1

②-1 若者が農業を通じた就労自立訓練（長期プログラム）に参加した	人数	20 人	2024 年 1 月	10 名	2
②-2 若者が共同生活を通じた就労自立訓練（長期プログラム）に参加した	人数	20 人	2024 年 1 月	11 名	2
②-3 若者が研修奨励金を得た	人数と金額			就労研修を行う若者と団体との間における金銭授受の取り扱いについては慎重に検討を重ねるべきだとの意見が内外よりあり。参加者の能力や状況により一律に出せる性質のものでもないため公平性を欠くことや、不当な労働の対価として見られる可能性など。今回のプロヘクト評価からは除外することが妥当と判断された。	②-3 若者が研修奨励金を得た
②-4 若者が目指すべきライフスタイルの方向性を定めるための活動（企業研修、就職面接、学校見学、田舎暮らし体験など）をした	件数、職員による活動レポート	40 件、若者一人一人に適した体験の機会を提供していくことができている	2024 年 1 月	＊20 件 諸団体との連携や会議など 若者交流館、北部サポステ、広島家庭裁判所、公益社団法人日本駆け込み寺、RCC、安芸高田 JA、四日市役場、認定 NPO 法人ポラーノ、安佐北区社会福祉協議会会長、亀山学区自治会町内会連絡協議会会長、安佐北区障害基幹相談支援センター、自立訓練事業所 TAKE5、NPO 法人ウイングかべ安佐北区障害者相談支援事業所、安佐北保健センター、相談支援事業所リアライブ高陽、一般社団法人百人邑、株式会社あおぞらみやん相談支援、はくなまたた相談支援事業所、	2

				NPO 基盤強化サポート研修会 ＊1 件 就職紹介→面接同行→就職決定 ＊1 件 障害福祉サービス就労移行支援事業所紹介→利用 ＊1 件 学校紹介	
③-1 関わった若者へ定期的に SNS 等を用いて連絡を行った	件数、職員による活動レポート	10 件×関わった若者の人数	2024 年 1 月	団体からの SNS 一斉発信 30 回 のべ 52 名／団体来訪 のべ 80 名／電話相談 約 100 名、500 回以上 LINE 上のやりとり	1

＊進捗状況：1 計画より進んでいる 、2 計画どおり進んでいる 、3 計画より遅れている、4 その他

② 事業進捗に関する報告

1.事業計画に掲げた短期アウトカムの達成の見込み
1.達成の見込み
2.アウトカムの状況
A：変更項目 ☐ 変更なし ☑ 短期アウトカムの内容 ☐ 短期アウトカムの表現 ☐ 短期アウトカムの指標 ☐ 短期アウトカムの目標値
5.新型コロナウイルス感染拡大に対して、事業活動を行う際に工夫した点
コロナ禍だからこそ、若者や子どもたちの外出や人と関わる経験機会を提供する必要性が増大し、2021 年より本格的なワークキャンプや収穫祭イベントを再開。基本的には屋外での活動をメインとし、宿泊を伴うイベントでは事前の PCR 検査を義務づけるなどした。手洗いや手指消毒、食事中のソーシャルディスタンスおよび黙食など心掛けた。実際に、キャンプ参加中に濃厚接触者になったという連絡を受けた参加者が現れたが、当人が即座に団体へ報告し、その時点で参加を離脱したところ、他の参加者への感染等は認められなかった。当人はその数日後に発熱し感染が認められたことから、早期での決断が功を奏したと振り返ることができる。こういう場合はどう行動するか、という指針をあらかじめ決めておくことの重要さが顕著となった。

③ 広報（※任意）

1.メディア掲載（TV・ラジオ・新聞・雑誌・WEB 等）
ひろしまひきこもり支援ポータルサイト「ハルモニ@ホーム」掲載 （2021 年 6 月）
RCC テレビ出演（2022 年 4 月 21 日放送）
RCC テレビ出演（2022 年 5 月 4 日放送）
RCC テレビ出演（2022 年 10 月 26 日放送）
就活サイト「ハタラクティブ」掲載 2022 年 5 月 15 日
農協新聞 複数回掲載

2.広報制作物等

3.報告書等

2020 年度事業 中間評価報告書（実行団体）

評価実施体制

内部／外部	評価担当分野	氏名	団体・役職
内部	全般	吉川望	NPO 法人ブエンカミーノ・理事長
内部	全般	金志明	NPO 法人ブエンカミーノ・事務局長
外部	全般	松村渉	NPO 法人ひろしま NPO センター・理事

A）事業のアウトカムの進捗状況の評価

①　短期アウトカムの進捗状況

アウトカムで捉える変化の主体	指標	目標値	達成時期	これまでの活動をとおして把握している変化・改善状況
①関わった若者の、こころの状態が整っている 団体の存在を知り、安心して過ごせる居場所を獲得し、自己肯定感、自立への動機づけが強化	＊問合わせ件数（電話、メール等）	＊120 件	2024 年 1 月	リニューアルした HP に設けた「お問合せフォーム」から、テレビを見て知った、という新規の問い合わせが出だしたのは当事業における大きな変化。 件数としては約一年間で当事者からの問い合わせ 20 件程度。ブエンカミーノへの問い合わせ（記事掲載依頼、利用方法、視察依頼等）は感覚的に 10 件程度あったが、正確な記録ができていない。 ブエンカミーノの関係者が紹介して繋がったテレビ取材などもある。 今後は当事者以外からの問い合わせについても記録していくこととする。

され、チャレンジのスタート地点に立つことが出来た。	＊プログラムへの参加人数（ワークキャンプ、就労自立訓練等）	＊220 人	2024 年 1 月	イベント回数 21 回、のべ 350 名 （ワークキャンプ、農業体験、サマーキッズ、ハロウィン、年末もちつき大会、災害ボランティア、収穫祭など） 350 名の内訳は、当事者の若者や、地域の親子、大学生、ボランティアなど多様であり、開かれたプログラムを行うことが出来た。
	＊自己肯定感、自立への動機づけ強化された ／当事者アンケート・職員による評価	＊参加者の８０％以上に何らかの向上が認められる	2024 年 1 月	アンケートは未実施。職員による評価については、中心スタッフ 3 名で日常的に話し合っているが、どのように記録すべきかという点については検討中。 定性的な評価ではあるが、参加者全員に何らかの向上が認められていると感じている。 アンケートについては、当事者の精神的・性格的な状況によっては信頼関係を失うことにもなりかねず、現状は実施を見合わせている。また当事者の関わり方も多様（ボランティアとして参加、長期間参加、半日だけの参加など）であり、アンケートの設計にも悩んでいる。 職員の評価については、現状の評価方法で把握できているが、ゆくゆくは当事者一人一人の状況を記録するなど客観的に把握できるような体制をつくる必要性も感じている。
②長期プログラムに参加した若者が、船出を達成した 実労働を通じて、目指すライフスタイルの方向性が定まり、その目的達成のた	＊社会的スキルが向上した／当事者アンケート・職員評価	＊参加者の８０％以上に何らかの向上が認められる	2024 年 1 月	アンケートは未実施。職員による評価については、中心スタッフ 3 名で日常的に話し合っているが、どのように記録すべきかという点については検討中。 定性的な評価ではあるが、参加者全員に何らかの向上が認められていると感じている。 アンケートについては、当事者の精神的・性格的な状況によっては信頼関係を失うことにもなりかねず、現状は実施を見合わせている。また当事者

めに必要な社会的スキルを身に付け、希望をもって就職や進学を達成した。				の関わり方も多様（ボランティアとして参加、長期間参加、半日だけの参加など）であり、アンケートの設計にも悩んでいる。 職員の評価については、現状の評価方法で把握できているが、ゆくゆくは当事者一人一人の状況を記録するなど客観的に把握できるような体制をつくる必要性も感じている。
	＊目指すライフスタイルの方向性が定まり希望を持っている／当事者アンケート・職員評価	＊参加者の８０％以上に何らかの向上が認められる	2024 年 1 月	アンケートは未実施。職員による評価については、中心スタッフ 3 名で日常的に話し合っているが、どのように記録すべきかという点については検討中。 定性的な評価ではあるが、参加者全員に何らかの向上が認められていると感じている。 アンケートについては、当事者の精神的・性格的な状況によっては信頼関係を失うことにもなりかねず、現状は実施を見合わせている。また当事者の関わり方も多様（ボランティアとして参加、長期間参加、半日だけの参加など）であり、アンケートの設計にも悩んでいる。 職員の評価については、現状の評価方法で把握できているが、ゆくゆくは当事者一人一人の状況を記録するなど客観的に把握できるような体制をつくる必要性も感じている。
	＊就職など達成した人数	＊10 人	2024 年 1 月	2 名が就職した。 長期プログラムに参加していない若者（電話相談やラインなどによる継続的な関わり）についても、5名が転職などを達成した。 中には、職場のストレスで追い詰められて危険な状態の若者からの相談もあり、早くに休職することをすすめるなども行った。 本計画では長期プログラムの参加者を指標としているが、改めて長期プログラムに参加していない若者（電話相談やラインなどによる継続的な関

				わり)に対する支援を行っていることが分かり、それらについても把握する必要性を感じている。
③関わった若者が、航海にチャレンジし続けている 仲間や支援者と関係を続けながら航海を続けている。	＊団体とのコミュニケーションが続いている／SNS、電話、メール、訪問、イベント、飲み会などの件数、参加人数など	＊関わった若者の 80%が何らかの繋がりを継続している	2024 年 1 月	団体からの SNS 一斉発信 30 回 のべ 52 名／団体来訪 のべ 80 名／電話相談 約 100 名、500 回以上 LINE 上のやりとり 日常的に代表はじめとするスタッフに関わった若者とのやり取りが発生しており、細かくカウントするのが非常に難しい。現状では明らかに確認できたもののみをカウントしている。日常的なコミュニケーションを出来るだけ負担なく記録していける方法を考えたい。 本指標についても検討を行い、関わった若者の定義を共同生活とワークキャンプに参加した若者とした。この定義でカウントすると、本事業期間内に 60 人が参加し、そのうち 55 人と関係が継続していて継続率は 91%である。

② アウトカムの分析「⑧アウトカムの達成度」（※任意）

評価小項目	評価小項目の評価結果	評価結果の考察

事業のアウトカムの進捗評価	評価結果の考察
事業のアウトカムの進捗の程度は、事業終了時には ☐ 短期アウトカムの目標値を上回っての達成の見込みがある ☑ 短期アウトカムの目標値の達成の見込みがある ☐ 短期アウトカムの目標値はおおむね達成できる見込みがある ☐ 短期アウトカムの目標値の達成は不透明である ☐ 短期アウトカムの目標値の達成は難しい と自己評価する	現場スタッフは、関わった若者たちが団体と関わりだした時に比較して、よい状態になって旅立っていると評価している。関わった若者たちからも同様によい評価を受けている。本事業については大きな目標にむけて順調に進んでいると評価している。 一方で、若者たちへのアンケート実施や定数的な記録を残すことについては、計画と現場の状況に乖離があることが分かり、その改善を検討しており、年内を目標に関係者が集まりアンケート表を作成することにしている。

B）事業の改善状況の評価

①　事業の実施過程・事業改善に関する評価

評価項目	評価小項目	評価結果	考察
実施状況の適切性	計画に示した導線づくりのアウトプットは計画的に算出されているか	おおむねできている。	大きな計画変更はなく、現状いずれもアウトプットの算出ができている。ただし定数的な指標については精度を高める必要がある。
実施状況の適切性	対象者グループについて、想定したアウトカムに向かった変化が出ているか	できている。	現場スタッフも参加者の若者からも、良い評価を得ており、想定したアウトカムに向かった変化が出ている。
実施をとおした活動の改善、知見の共有	事業の進捗において必要な実施状況の見直しが行われているか。	できている。	若者たちへのアンケート実施や定数的な記録を残すことについては、計画と現場の状況に乖離があることが分かり、その改善を検討しており、年内を目標に関係者が集まりアンケート表を作成することにしている。
組織基盤強化・環境整備	計画に示した組織基盤強化が進んでいるか	できている。	日本 NPO センターのプログラムを通じて、約 15 名の中間支援組織スタッフから組織診断を受けた。

②　短期アウトカムの状態の変化・改善に貢献した要因や事例

コロナ渦からの自粛があけ、対面での関わり（ワークキャンプなどの実施）が再開されたことにより、交流や体験の機会が増えたことが、短期アウトカムの状態の変化・改善に貢献した要因だと考える。

③　事前評価時には想定していなかった成果

本計画では長期プログラムの参加者を指標としているが、改めて長期プログラムに参加していない若者（電話相談やラインなどによる継続的な関わり）に対する支援を行っていることが分かり、成果が上がっていることも分かった。

④　事業計画の改善の必要性の確認

- ☑ 社会課題のニーズに事業計画の内容は合致している
- ☑ 受益者や事業対象グループのニーズに事業計画の内容は合致している
- ☑ 事業計画に記載している活動は、アウトプット⇛アウトカムへのつながりが実際に確認できている
- ☑ 残りの期間の資金配分・人員体制・スケジュールは活動を円滑に行えるよう計画されている
- ☑ 短期アウトカム指標は、事後評価時に測定し、達成度を評価することが可能な内容になっている

事業の改善状況の評価結果	評価結果の考察
残りの事業期間で、事業が短期アウトカムを達成するために ☐ 事業計画は適切に改善されたといえる ☑ 事業計画を適切に改善する見込みがある ☐ 事業計画の改善について、課題が残っている と自己評価する	大きな計画変更の必要はないと判断しているが、定数的な指標については精度を高める必要がある。

⑤　中間評価結果を踏まえて今後注力したいまたは早急に取り組みたい事項をお聞かせください。

若者たちへのアンケート実施や定数的な記録を残すことについては、計画と現場の状況に乖離があることが分かり、その改善を検討しており、年内を目標に関係者が集まりアンケート表を作成することにしている。

添付資料

活動の写真（画像データは１枚２MG 以下、３～4 枚程度）